

救急の窓から社会が見える
—武千春救急総合診療部長に聞く



救急車に乗った患者さんの搬送先がなかなか決まらない……。新聞やテレビでは、こうした救急医療をめぐる問題がしばしば取り上げられています。当院では、必要な患者さんに、いつでも門戸を開く開かれた救急医療を目指して、病院をあげて奮闘中。その要に位置する、救急総合診療部の武千春部長をご紹介します。

● 医のヒューマニズムにあこがれて

「実は、医師を目指したのは浪人してから。現役時は理工系志望だったんです。元々、中学時代から生物部に属し、生命に興味はあったのです。でも、人の命を預かるのは次元が違う重さがあると感じていました。変化のきっかけは、医のヒューマニズムを描いた本を読んだことです。僻地医療を志した徳州会の徳田虎雄さんの本や、『飛鳥へ、そしてまた見ぬ子へ』などを読み、医師という仕事に惹かれたのです。」

「飛鳥へ、そしてまた見ぬ子へ」とは、徳州会病院の医師であった井村和清氏（一九四九〜一九八〇）が骨肉腫の闘病中、子どもたちに向けて呼びかける形で書いた手記。一九八〇年に出版され、ミリオンセラーとなりました。二浪後札幌医大に入学した武部長

は、地域の抱える社会問題にも関心をもちながら、卒業後は北海道に残ろうと考えます。しかし、地域医療に熱い思いを抱く先輩の勧めに心が動き、東京に戻って地域医療をやろうと決め、平成元年六月当院に研修医として就職。研修医二年目からは、循環器内科にもかかわりつつ、平成五年三月まで内科で活躍しました。

その後は大病院を経て中野にある慈生会病院の内科部長に着任。そこで十年以上を過ごした後、去年三月当院に戻り、九月から救急総合診療部長の任に着いています。

● 救急外来診療部の一瞥

「朝八時から、院長、副院長を交えた引継ぎが始まります。夜間の救急対応にあたった二年目の研修医が、夜間の状況を引き継ぎます。これを受けて、僕は日中担当の二年目研修医と共に、十九時頃まで救急総合診療部で急患の対応をします。いろいろな患者さんがみえて、初めは病状がまるでわからないこともありませぬ。でも、そうした混沌とした中で、問題点を整理し、患者さんの状態がわかってくる。このプロセスは、非常に興味深いんですよ。救急の面白さはそこにある、と武部長は分析していました。一方、救急の難しさは、と問うと、即座に返ってきたのは「採算性の難しさ」。武部長いわく、救急患者さんの数は、日によって非常に違い、職員の配置が難しいと言います。「一番忙しい時に合わせるのは採算的に無理でしょうし、かといって、あまりに少ない人員配置では、安全が守れませんし。ここが難しいところですよ」。どこも経営に神経をすり

減らさねばならない医療界にあって、「当院は、まだ救急に人を厚く配置しようという気持ち強い、体力のある病院だ」と思えますよ」と語る武部長。さらに続けて、「もうひとつ大事なことは、病院全体のチームワークです。救急は、救急部門だけではなり立ちません。急患を受け入れたら、病棟で入院をお願いしなければなりません。院内全体の取り組みが大事なんです」と。この連携も、ケースを重ねながら、より良い形が作られてきているようです。

● 救急医療の問題点

武部長によれば、昨年当院が受け入れた救急車は月に約三〇〇台、年間四〇〇〇台程度だそう。最近では、救急車を軽症者が使い、重病の人が運べない、という問題がしばしばマスコミを賑わせています。これについて尋ねると、武部長の答えはこうでした。「救急車をタクシー代わりに使う人がいる、つていう話はテレビや新聞によく出ていますよね。確かに、そうした例がないとは言いません。でも、僕の実感としては、『軽症だったのに』というのは結果論でしょう？ 具合が悪くなった時には、軽症かわからない場合もありますよ。その不安な気持ちも思っています。批判をそのまま肯定できないんだなあ。そうした稀な例をもって全体を語るのには、大事な物を見落とす気がします。慎重な語り口の武部長。そして今後の抱負は？との質問に、「これから救急の窓を通して、社会を見ていきたいと思えます」とお答えいただきました。人間と、社会と。そのかわりを実感しながら、これからもがんばってくださいね。

平成元年から五年の在職時、私は武部長と今の7A病棟で一緒に働いていました。私は確か三年目の看護師で二五歳。武部長は二八歳。いや、若かったですね。お互い今は四十代後半に突入し、「働き盛り」での再会です。お互いよい仕事をしたいですね！……と、今回は内輪ネタの締めでした。（看護部 宮子あずさ）

北京オリンピック報告
柔道チームドクター
整形外科 紙谷 武 医師に聞く



私たちに多くの感動を与えてくれた昨年八月の北京オリンピック。中でも柔道は日本中の期待を背負い、注目度も高いものでした。その日本柔道にチームドクターとして同行し、メダル量産の影の立役者となった、整形外科・紙谷武先生のオリンピック報告です。

自ら今も道場に通い、二歳のお子さんにもぜひ習わせたい、と柔道に熱い思いを寄せる紙谷先生。二年前当院で働き始めた頃、観戦していた試合会場で中学時代の恩師から誘われチームドクターに。以来、様々な大会でのケアや当院での診療を通して、チームと関わっています。集大成とも言える北京オリンピックでの活動はどのようなものだったのでしょうか。

「テレビの放送時間に合わせて試合が組まれたので、昼から会場へ行き、試合とその後のドーピング検査、すべて終わって帰ると十二時でした。」試合中は選手のすぐ横に待機していたので、テレビ中継で先生に気付かれた方も多かったのでは？ 選手十四人中三人が怪我を負ってしまい、銀メダルを獲得した塚田選手も足に注射を打って決勝に臨んだとのこと。「特に肘は背負い投げで傷めちゃうんです。肘の怪我といえど野球肘、というイメージですが、柔道でも多くて注意が必要なんです。」想像に違わず怪我の多い柔道。そのため、総合格闘技への転向を表明した石井選手など、オリンピック前から当院で治療していた選手もいました。金メダルを獲得した内柴選手は、五輪後の入院生活をブログで語っていますので、選手からみた病院の世界もぜひ、覗いてみてください。

最近一部で「弱くなった」との厳しい指摘もある日本柔道。自らも柔道五段で、医師でもある紙谷先生の分析は？ 「日本が弱くなったのではなく、ライバル国が強くなった、というのが実情でしょう。ヨーロッパ勢とは体格や基礎体力が全然違いますからね。そこに技術も加わると簡単には勝てません。体力差の大きい男子は特に難しくなってくるでしょう。」ロンドン大会では苦戦を強いられそうです。それでも「多くの有望な子どもたちが、当院の様々な診療科でお世話になるようになってきています。その中から、オリンピックで活躍できる選手が育ったら嬉しいですよ。」と夢を語ってくれました。

『年金病院から金メダルを』
四年後、この夢の実現を願って。



（リハビリテーション室 横関真里）

「心」にまつわる話題が多い今日この頃ですが、皆さんは「臨床心理士」という職種をご存知でしょうか。心に関係する仕事ということは想像に難くありません。しかし、私たちも実際にお話を伺うまでどんな仕事なのか知らずにいたのが本音です。



下平憲子先生 市川里美先生

●臨床心理士とは？
先生方の温かなお人柄もありとても和やかにインタビューは始まりました。臨床心理士のお二人は神経科に所属されており、火曜日に市川里美先生、木曜日の午前と金曜日に下平憲子先生が勤務されています（平成二十一年一月現在）。

「子育てや夫婦・会社との人間関係などについて悩んだ経験は誰にでもあると思います。そうした戸惑ったり困った状況を、どのようにかえていくか、考えたり一緒に考えます。また、考える力自体が弱くなっている場合もあるので、考える力が十分に機能していくようにサポートしていく立場が私達の仕事の基本的な姿勢です。」

医療は診察をして患者さんへ回復への道筋を示したり導く立場ですが、

臨床心理士は答えを示すのではなく「一緒に考えていく」立場ということを知りました。

●どんなことをしているの？

ご相談にいらした方が、どのような問題で困っているのか、それを明確にすることが最初に「一緒に考えること」なのだそう。まずは患者さまとお話しして、場合によっては心理検査を実施して検討していきます。我々はこれを「アセスメント」と呼びますが、最初の四回ほどの面接は「何が問題になっているのか」しっかりと検討するために使います。四回が終了する時点で問題が解決する方もいらっしゃるし、より長期的な面接が望ましい場合もあります。また、他機関でのサポートのほうにより有効な場合もあります。患者様一人ひとりに適したサポートができるように様々な方針を検討します。患者様お一人の一回の面接は三〇分、五〇分ですが、方針を検討するには、その方のそれまでの人生をお聞きすることにもなるので、一回五〇分×四回でも時間は足りなくらいです」と説明してくださいました。

●当院で臨床心理士に出会うには？

当院で臨床心理士に出会うには、まずは神経科を受診し、主治医への心理面接希望と相談が必要となります。身体疾患で当院を受診されている方も、この手続きをふめば相談することができそうです。ご希望の方は現在受診されている科の主治医にまずはご相談されてみてはいかがでしょうか。先生方は、「こんな事相談していいのかな」と思われている方にもご利用いただければとおっしゃっていました。

●お二人の内面をさぐる

お二人とお話していて、教養の深さを感じずにはいられません。臨床心理士になるには、財団法人日

理士資格認定協会の指定大学院を修了し、資格試験に合格する必要があります。さらに、恒常的な資質向上を目指して五年毎に資格更新が義務付けられているそうです。そのため学会発表や論文執筆、勤務後の研究会などを積極的にこなしていらつしやいます。そんな中で息抜きは「身近にすぐできること」で、楽しむということだそう。ストレスを解消するためにしていることを意識すると効果倍増とのこと。上手な息抜きと常に学ぶ姿勢で仕事されていることが大変よく伝わり、別館の地下二階にある臨床心理室が身近になったような気がしました。

（医療情報部 山田有希子）

何故、三食食事をしなくてはならないの？

三食食事をする必要はあるのでしょうか。一食まとめて一日分のエネルギーをとっても、二食に分けてもいいのではないかとお思いになる方もいらっしゃると思います。一日の総エネルギーだけで考えるならば同じ総エネルギーであれば数字だけは確かに同じかもしれませんが、生命維持をする為に、まとめ食べの方が体に蓄積し易く痩せにくくなります。また、欠食した分、摂取エネルギーが多くなり易くなります。三食時間を決めて食事をすることにより、身体のリズムが整い、太りにくく、必要以上のエネルギー摂取を予防することが出来ます。幼稚園の時から「三食食事は時間を決めて」「ゆっくり良くかんで」「お菓子ばかり食べない」ということ、もつと昔からの「腹八分目」など言われていることは、永遠のテーマなのかもしれません。

「鉄腕アトム」「機動戦士ガンダム」が現実の物となろうとするぐらい、科学・医学・産業等々の進歩は目覚ましいものがあります。人間の進化は、もつとずつとゆっくりなので、先人の知恵は大切にしたい物です。

（栄養部 鬼頭延枝）



今回は外来患者さんの受付やご案内をお手伝いしている安川清一さんをご紹介します。

●ボランティアを始めたいきっかけは？

義父と私自身が当院で続けてお世話になり、お医者さんや看護師さんとの御縁ができました。ボランティア活動を何かやろうという時に、インターネットで当院のボランティア募集を見つけ、応募したのが始まりです。

●ボランティアとして働いての感想は？

本館一階の再診受付機の辺りで患者さんのご案内をしています。受付時間後は、総合受付に座って、ご案内をしています。必要に応じて、視覚障害の方のご案内、車椅子のお手伝い、目的の場所へのご案内、タクシーへのご案内、などもやっています。

●いつもどんなことをしてすごしていますか？

忍者体操を週二回続けています。普通は鍛え難い背筋と股関節を鍛え、汗を沢山かいて、体内の老廃物を出し、良い気がでるように、と言うものです。

●皆さんに一言

ラジオで、毎日八杯の水を飲み、週三時間歩き、二十分から三十分温浴をすると免疫力が高くなる、と聞いて納得しています。

安川さん、いつもやさしい笑顔での対応をありがとうございます。

（医療福祉相談室 井上忠司）

二〇〇八年十月の衣替えより、事務職員が九年間愛用した制服が新しくなりました。

以前は夏用二種類、冬用二種類の計四種類ありましたが、今回の変更により夏冬合わせて一種類になり、デザインも可愛らしくなりました。

今回、変更することになったのは、制服のデザインが廃盤になってしまった製造中止により新しく発注が出来なくなりました。またこの機会に以前は多種類だったため在庫管理が煩雑であったなどのことから、オールシーズン着用できるものにしたという理由もありました。新制服は、定番で廃盤になりにくいもの、オールシーズン着られるもの、病院に合う色合いのもの（例えば、医師↓青と白、看護師↓白、事務↓ピンク）、等といういくつかの条件をクリアし、何種類もの候補の中から厳選されました。

制服が変更された直後は、制服が替わった事に対して、その他の職員から反応が多々あり、評判は上々のようです。

着用している方からは、「目立ってわかりやすい」、「スカートにストレッチが入り伸びて便利」、「厚手なので冬は暖かい（夏は暑い？）」、「ポケットが小さくなった」、「汚れやすいが、ホームクリーニングができるから洗濯が楽になった」、「スカートのフックがパネ式になっていて少々食べ過ぎても問題ない」、などの声をいただきました。しかし、以前はキュロットがあり、動きやすく好評だったので、スカートのみになつてしまつた事は少々残念です。

今後も改訂はあるのでしょうか。どうぞお楽しみにお待ちください。



（病歴室 山本早矢加）